

伽倻子のために

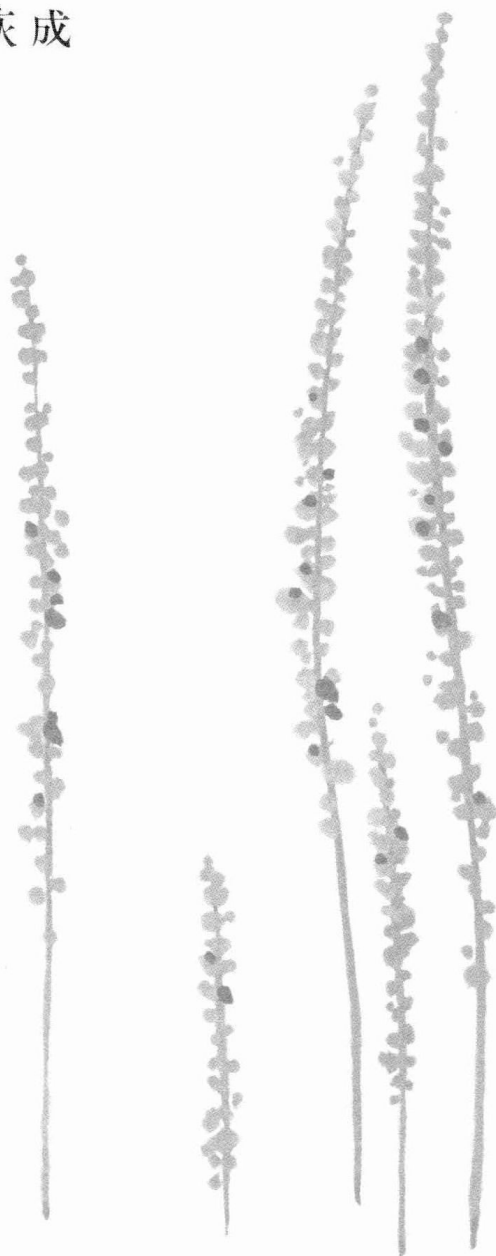
李 恢 成

青春の魂の軌跡を《心の墓碑》に刻む——

暗い過去の記憶に侵蝕され、可憐な少女から妖女へと
変身する伽倻子^{かやこ}。自己の内に朝鮮人としての生の復権
をめざし、伽倻子の中に愛の証し^{イムサンジュニ}を求める林相俊。偏
見と差別を越えた勇気ある愛の挫折を描く力作長編。

伽倻子のために

李 恢 成



新潮社

り かい せい
李 恢 成

1935年 樺太に生れる
1960年 早大露文科卒業
1969年 群像新人文文学賞受賞
1972年 第47回芥川賞受賞
著 書 『またふたたびの道』
『われら青春の途上にて』

伽椰子のために

昭和四十五年十二月十日 発行
昭和四十七年二月十日 五刷

著 者 李 恢 成

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七十一
電話 東京(〇三)二六〇一一一一
振替 東京八〇八

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 神田加藤製本株式会社

定 価 五五〇円

落丁・乱丁本はお取替えします

© Kaisei Ri 1970 Printed in Japan



伽倻子のために

李 恢 成

青春の魂の軌跡を《心の墓碑》に刻む——

暗い過去の記憶に侵蝕され、可憐な少女から妖女へと
変身する伽倻子^{かやこ}。自己の内に朝鮮人としての生の復権
をめざし、伽倻子の中に愛の証し^{イムサンジュニ}を求める林相俊。偏
見と差別を越えた勇気ある愛の挫折を描く力作長編。

『伽倻子のために』は、李恢成氏の(……)文学的道程のた
しかな^{屏風のなかで}ハレつの記念とみなすべき作品で
ある。くても清新な息^{息々}しくても清新な息づ
かいに^{読者たちとのあいだに}の読者たちとのあいだに、
幸福な^{であろうことを信じる}であろうことを信じる
ことが^{単なる、美しい青春}は単なる、美しい青春小
説以上のものである。完整PDF请访问：www.dajiangbooks.com 大江健三郎

前 章

R町が終着駅であつた。

函館方面からやってきた二台連結の気動車はゆっくりと最後の枕木を押しつけて停つた。

まもなくドアが開くと、通学の男女高校生や行商を終えた中年の女達がつぎつぎとプラットホームに降り立つたが、彼らはいくらか疲れた足取りを分ち合つてそろそろと手前の改札口の方へ向つていく。

もう誰もいないとみえた気動車からそのとき三十歳は越したとおぼしい男がひょっこりあらわれ、プラットホームの敷石を踏んだ。グレイのコートを身につけ左手に黒地の布カバンを携えただけの軽装である。降り立つたとき彼は眩しそうに回りを眺めたが、やがて思いついたようにもう陸橋のかげに姿を消そうとしている乗客のあとを追つて、これもゆっくりとした足取りで改札口に向つて歩き出した。

男の名前は林相俊^{イムサジュニ}といつた。東京から十一年ぶりにこの町に訪れたところだった。彼にとつてこの町の景色はすべて眩^{まばゆ}く思われる。

鉄道の構内は海をのぞんでおり、複線の線路を渉^{わた}ってくる風は潮の匂いをふくんでいた。あるかなきかに昆布の匂いが混^まつてくる。彼は鼻腔をふくらませ潮風を深く吸いこんだ。肺が海の闖入者にあわて出し忽ち混乱におち入っていくのがわかる。

上空で鷗が啼いていた。冬日の空を低く高く漂い、とみる間に風に流されてまた恣意に翻りケオケオと何をか町に告げながら翔^はんでいる。その声は賢^{さか}しらげで、やや饒舌にきこえる。彼は自分がこの町にやってきたのを誰にも知られたくないのであった。

改札口を抜け、くすんだベンチがいくつか置かれている待合室をよぎると、小さな広場になっていた。今しがた気動車から降りたかつぎ屋の女達がゆっくりと広場をよぎっていく。大きな荷物のため彼女達の後姿は紺色のモンペとゴム靴しかうつらない。やがて荷物は人通りの少ない町のなかを左右に分れはじめ広場からひとつひとつ消えて見えなくなった。

林相俊は駅前のポストのわきでしばらく立ちつくしていた。ある決心を迫られていた。歩き出せばいいのだ。坂の上にある老人の家に向って。この町にやってきたのはそのためであった。その家で老人の仏前に焼香するためにはるばる東京からやってきたのであった。だが、なぜ気が重いのだ。向っていくことができぬのだ。

昼下りの町をかすかに波音が洗っていた。ふと彼は心を動かされた。そうだ、海にいつてみよう。この町の海は十一年前の出来事とつながっていた。その年の冬の夜、彼は海を長いこと見つめていた。それから下りの最終列車で函館に向い、それ以来きょうまでこの町にもどることはなかったのだ。

そのときはもう二度とこの町には来まいと心をきめている。来ようにもその理由がなくなっていた。もはや他人の町となっていたのだ。

駅と人家のあいだに雑草の生えた小径^{こみち}がのびていて、百米ほどいったところに踏切がある。家の軒下に吊された秋大根が目についた。大根は黄色く萎びており、もうすぐこの地方に雪が降り出すのを感じさせる。

踏切までくると、林相俊の眼差は自然にそこから見える遊興街に投げかけられた。いやな思い出がよみがえった。まだバー・タンポポはやっているのだろうか。彼はそう呟いてみる。「黒い花びら」という流行歌がはやっていて。背筋が寒くなるのをおぼえ、彼はいそいで眼を逸らした。踏切を渡ってしまおうと防波堤に突き当る。防波堤は駅の全長と同じ長さのもので海に沿って町を守っている。鷗の落し物が白ペンキの点滴^{てんてき}みたいに附着していた。

防波堤に立つと、林相俊の体に潮風がまといついてきた。レインコートは風をはらみ膝頭をコート^{コート}の裾が叩いた。彼は海からななめ横の姿勢で風をしのいだ。目薬を差したように目尻が涼しくなり、涙が滲んできた。

海は内浦湾といった。外海でないので波は高くない。海に面した防波堤の壁は五米ほどあって、テトラポットがごろごろと投げ入れられている。それは巨大な海星^{ひとて}の化石^{化石}みたいに見えた。波はテトラポットの爪に抱き取られ覇氣を失い小さく砕けてしまう。

林相俊の視線はやがて浅瀬の一点に注がれ出した。波間に見えかくれしながら首を覗かせている一群の杭が見えた。杭は黒く濡れて光り、焼けぼっくりのようである。昔は舟着場であったの

であろうか。しかしとつくに橋桁を失い、杭だけになったその残骸はなにか海の卒塔婆のように無気味にうつってくる。

あの海の卒塔婆のようだといふと彼は思う。おれの心にも墓碑が沈んでいるのではなからうか。焼けぼっくりのような心の墓碑が。

あるとき、と彼は思う。海に向っていくとも聞いかけた気持であつたのだ。おれは一体何に負けてしまつたのだらうかと——。もちろん海は答えなかつたし、黒々と闇を拡げ細波をたてていただけであつた。

——過渡期なのだ。

——いまは過渡期の青春なんだよ。そう思つてこの試煉を乗りこえていくべきなんだろうな。でも、おれたちはきつとうまくやつてみせるよ。

朴楚の言葉が波のうねりのように持ち上つてきて林相俊の心をとらえた。

やつならきつとうまくやるだろうと思う。三村真紀子とうまくやつていくことだろう。

林相俊は防波堤の上を歩きはじめた。それでもせねばすまぬ気持だつたのだ。しきりに自責の念が湧いていた。潮風が一層目に沁みてくるようだった。コートを叩く風が心まで打ちつけてくるように思われる。

そのとき遠くで汽笛の音がきこえた。汽笛は自分の内部から放たれた鋭いかなしみの声に似ていた。白煙を吐きながら急行列車がR町に近づいてくるのが見えた。遠くにそびえる駒ヶ岳をしないで煙で包みあげながらぐんぐん近づいてくる。あの汽車に乗つてR町にやつてきた頃のこと

が夢のようだった。その頃、R町は心の町だった。どれほど親しく感じられたことだろう。この町で知っていたたった一軒の家がその感情を優しくはぐくんでくれたのであった。そのときはよもやこの町が他人の町となるとは想像もしなかったのだ。

急行列車はR町では停らない。気動車でくるとR町は終着駅になるが、急行列車はもはやかつてのように停車しなくなっていた。十一年前にはR駅で三十秒停車をした。あわてて彼は荷物を手にしてプラットホームへ飛び降りたこともあったのだ。

十一年の歳月は林相俊の周囲にもさまざまな変化をもたらしていた。彼は複雑な気持でR町を通りぬける列車の流れを眺めていた。

一章

林相俊^{イムサンジュニ}がはじめてR町に降りたのは彼が大学に入つた年であつた。

一九五六年の夏、相俊は一年ぶりで東京から北海道S市の実家に帰つてきた。

彼は家に着くと、臍^{へし}抜けたようになり何日か過した。彼の父は息子が一日じゅう二階に閉じこもっているのを時たま、そつと覗きにきたが、それ以外のときは腫物にでも触るようにそつとして置いた。息子は一年前に家を飛び出し、突然もどつてきたのである。フーテンか浮浪児になると思つていた息子はいっぱしの大学生となつていた。

相俊は父がそのことだけで自分に寛容になつてゐるのがわかつてゐた。屋根裏部屋でころがっている、「サンジュニー」と戸越しに声を掛けて入つてくることがある。用があるのかというところでもなく、ただ何となく入ってくるのだ。そんな父をじつと見つめてゐると父は尤もらしく立てつけの悪い雨戸を締め直して出て行く。父がいなくなると、彼はまたぼんやりと大の字になつてゐた。

一週間も経つと、相俊は義母に話して東京にもどる準備をはじめた。義母はおさなりのことし

か言わぬから都合がよいのだ。しかし父ははや息子が東京へもどっていくのにびっくりしたらしく、もっとゆっくりしていくように言った。だがいったん思い立ったら結局そのようにする息子であるのを父はしっていた。家出したときもそうだったのである。

家を発つとき、相俊はS駅まで見送ろうとする父を何とか思いとどまらせ、玄関先で別れた。遠慮深くなった子供を父はどこかで哀^{かな}しんでいた。たつて息子を引き止めることのできない父にも遠慮があるのであった。

この関係が生じたのは相俊が家出し、もどってきてからである。父子はそれまでのようにお互いに絶望し合うようなことはなくなつたが、奇妙に遠慮深くなつてしまつていた。一週間のみじかい滞在中、これではだめなのだとなんとか思いながら、彼は何らなすこともないまま日を送つてしまつた。家にもどつたのは上京後、省みるところがあつたからである。親許を離れた生活は彼に労働を強いた。その時分、彼は否応なしにいくつかの職業を転々としながら夜は予備校に通つた。そして今春ある私立大学を受験したが遅よく入ることができたのだつた。

受かつたときなぜか宙天の風を想い浮べたものである。空中で平衡を失つた風がぐるぐると弧を描きながらそれでも地面に落ちずに低空で舞っているような――。受かつたのはまぐれであつたが、その頃から彼は父に会いにS市にもどろうと思ひはじめたのだつた。何故あのような拙い形でしか上京できなかったのかという悔いの感情が芽生えていた。

・ところがいざ家にもどつた一週間はかくのごとき様^{さま}だつたのだ。父が自分をそれとなく劬^{いた}氣配を察すると彼はへんに心の扉を閉ざしてしまつた。そして家出以来の疲れが出てきたようにな

りごろ寝ばかりしていた。だが、面と父に向うと妙に自分が遠慮をしはじめているのがわかる。父の挙措にも申し合わせたようにそれがあり、一刻もはやく東京に発ちたいという気持にさせられたのであった。わずか一年ばかりのうちに人間が暗くなつたのかもしれない。なかつた。

親を哀しめたという悔いがそのまま残つたが、相俊は急行列車でS市を後にした。

途中、彼は函館に近いR町というところで下車しなければいけなかつた。父に用事を言い附かつていたからである。せめてもの罪ほろほしであつた。それにおじさん^{グナギ}と久しぶりに逢えるのである。樺太で最後に見て以来、ほぼ十年ぶりで逢うことになるのだつた。

夏陽がゆらめきR町は一片剥けていた。相俊は水打ちしてある待合室を出ると、駅前広場をよぎつていった。父から手渡された地図通りに右手の角に折れ、日差しが影の町をつくつてゐる舗道をしばらく行つて山手の坂を登りはじめた。坂道は日照りで赤茶っぽく乾燥してゐて轍の跡が硬い皺面をつくつてゐる。坂の途中には下見板のとれた老朽した平屋などが立てこんでゐるが、それらの家々が跡切れたところの右手は空地になり一段高い坂を登りつめた位置にまた家々が並んでゐた。そこで何気なく坂を振りかえると、盛りあがるような夏海の水平線がちょうど眼の高さになり、町は紫青色の海に沈んでしまつてゐた。

相俊は視線をかえ、坂の上の家々を眺めた。この何軒かのうちどこかがおじさん^{グナギ}の家になるわけである。柩葺が剝けたそれらの家々はいかにも貧しげであつた。

そのとき相俊は異様な光景を見つけた。

一人の少女を囲んで三人の子供達が攻撃をしかけ、体に触れようとしてゐるのである。少女は

中学二、三年くらいでお下げ髪をしていた。子供達の方はまだほんの小学二、三年生くらいである。その一人はいがぐり頭をこりこり少女の胸に押しつけ、もう一人の子は薄地のスカートを引っ張ろうとし、三人目の子が少女の腕にしがみついている。悪戯にしては淫らでへんに真剣な動作だった。

「こら、こら」と少女はしだいに泣き面になり、悪童共の頭や背中を掌で叩いた。しかしその手附はまるつきり力がなく、どこか手毬でもつくように頼りなくうつった。

相俊が近寄っていくと、子供達はぱっと少女から離れた。そして一瞬邪魔者をみる目附で彼を見上げたが急にきまりが悪くなったのか、柄の大きい鼻の頭に汗をかいた子が袖口で涙を拭い、それが合図のように子供達は一斉に蜘蛛の子を散らしてしまった。

少女はすばやくずれたスカートを直し、少し気まり悪そうに上目遣いに彼を見つめた。相俊は素知らぬ顔で少女に松本家を訊ねた。おじさんは通名を松本秋男といっていたのである。少女はきき終ると黙ってついそこの家を指さし、そのまま坂道の方へすうつと離れていった。

「だれだね？」

半天にモンベ姿の小母さんは彼を見ると陽焼けした四角い顔に訝りの色を浮べた。それでも曖昧な笑顔を漂わせているが、場合によってはけんもほろろな応待をしそうなのが彼女の容貌から感じられた。

「わかりませんか？ 樺太のM町にいた——林の相俊ですが……」

やっと小母さんの眼に手懸りをつかめたような表情がのぼってきた。そのとき人影が小母さん

の後ろでゆらめき、彼女がわずかばかり体の分だけ明けていた障子がいっばいに引かれた。

「おまえ——サンジュニじゃないか！」

クナボジが仁王立ちになり、彼の名前を呼んだ。

相俊は照れくさそうに頷いた。これで身分の保証はついたわけだ。

「これは何の知らせだ。ウリ（僕）は夢にも見なかったぞ。どうして、こんなことが——。さあ、入れ入れ」

クナボジは息遣いがはげしくなり、相俊の手を取って薄暗い部屋に招き入れた。

「林さんにこんな息子さん、いたかえ？」

小母さんはまだ立ったまま相俊をためつすがめつしていた。

「何をいうんだ。林の男のバツチ（末っ子）じゃないか。そうださ、お前が忘れるのも無理はねえ。あれからもう十年も経ったものな。それだべし、こんなにでっかくなるさ——」

クナボジは成人した彼を嬉しそうに見上げた。昔は相俊が見上げたものなのだ。歳月はそのように変っていた。おじさんはもう老人の年になっていた。

「らくにしろ、楽にな。ここはどこでもない、お前の家と同んなじなんだから。ウリが樺太でどのくらいお前ン家で世話になったか。死んだお前の母さんはこのウリを兄さん兄さんと立ててくれて、真心から面倒ば見てくれたんだぞ。——そうか、よつく来てくれた——」

つい老人は涙を浮べ、脂で黄ばんだ指で目頭を抑えた。

「いやだね、とうさん。嬉しかったらなんにも泣くことねえべさに」

二人のあいだにちんまりと達磨のように坐った小母さんは笑いながら言った。彼女は日本人であつた。戦後まもなくM町で老人と再婚した人である。

「そうじゃねえ。そうじゃねえんだ」

シャツ姿の老人は弁解するように呟き、背を屈めて刻み煙草をゆつくりキセルの雁首に詰め出した。

氣ぜわしく一服吸うと、老人はS市の消息を訊ねてきた。父が言附けたのもそのことである。戦争が終るとどちらも二年ほどして樺太から引揚げてきたが、その後消息がわからず、何かのことで少し前から連絡がついたのだつた。しかし生活に追われて老人と父はまだ会うこともできずにいた。老人は父より七八歳齡が多く、父とは祖国の郷里が同じで二人は義兄弟の縁を結んでいた。そんなところから父は東京にもどる相俊をいわば名代として挨拶に寄こしたのである。

相俊は父が持たせてくれたおみやげを小母さんに差し出した。彼女は仰山に喜んで受けとると立ち上つて井戸から真水をコップに汲んできた。

「学生服ば脱げつて。この暑いのに。今晚、うまい鮭あぎあじば喰わしてやるからな」

どうも、と上の空で答え、相俊は父について老人に語り出した。しかし、喋ろうにも彼は自分が父をごくありきたりにしか理解していかないのに氣づかされた。たとえば彼は父が生活を維持するのにどんな苦勞をしているかといった観察は殆どしてこなかった。彼が見てきたのは生活の苦しきであり、父の愚痴であり家庭の暗さであつた。だから、話はいい貧乏生活について触れられがちだったが幸いなことに一家健康であることを告げ、自分が昨年父と喧嘩して家出したような

ことはそっくり伏せて置いたのだった。

気づくと老人達は深刻な表情で耳を傾けていた。小母さんは話をきき終ると日焼けした手首を一方の手で擦りながら、やっぱし、と失望したように呟いた。

「ゆるくないんだべさ。わしらときっと同ンなずなんだよ」

「小母さんも引揚げてから随分苦労したんでしょ」

相俊はどこも同じなのだなと思った。

「わやだったもの。はっちやきこいて働いたって暮しさばつかけられっぱなしなんだ」

渋い顔をして小母さんは喋り出した。「わや」というのは大変だということ。「はっちやき」は一所懸命という意味の浜ことばである。暮しに追いかけられている話を彼女がしているそばで老人は黙々と半紙を細く裂き、紙撚こよりをこしらえていた。

そのとき静かに玄関の開く音がし、人影が障子にうつった。

「伽倻子か」

老人は手を休め、猪首を起して玄関口を見やった。

うん、と答える小さな声がし、戸が明けられた。何気なくうしろを振りかえった相俊はおやと思つた。さきほどこの家を指でさし示すと坂の方へ歩いていった少女だった。少女は彼の視線を避け、彼の背後からすうっと隣の部屋へ抜けていこうとした。

「伽倻子、なしてお客さんさ挨拶しねえの。いつまで経ったって孩兒ねんねなんだから」

見咎めて小母さんの声が飛んだ。彼女の突き出したような目はそんなとき余計に飛び出し、そ